

# 関わり合いを通して、運動の楽しさを味わうことができる体育学習

名古屋市立東志賀小学校

杉原 康太

## 1 この実践を通して、どんな子どもを育てたいか。

本学級の子どもは、運動部に積極的に参加したり、休み時間になると運動場で外遊びに親しんだり、体を動かすことを好む傾向がある。体育の授業では、技能を向上させようと熱心に練習に取り組む子どもの姿も見られる。

1学期に行った「走り幅跳び」の実践では、多くの子どもが仲間と動きを見合う活動を通して、技能や記録の向上をめざして運動に取り組むことができた。しかし、技能ポイントをもとに動きを教え合ったり、伝え合ったりする姿を見ることはできなかった。

子どもの実態を踏まえ、私は、仲間との関わり合いを通して、運動の楽しさを味わうことができる子どもを育てたいと考える。体育学習における「関わり合い」とは、運動者への記録測定や励ましといった態度面だけでなく、技能ポイントに基づく動きの確かめを、自己評価だけでなく他者評価による伝え合いにより相互評価すること。さらに、技能習得の際に個人技能の向上のみならず、教え合いや学び合いにより、互いの動きの向上をめざしていくことと考える。

「関わり合い」を通して運動に取り組むことで、一人でできた喜びよりも、さらに大きな喜びを得ることへとつながり、できた喜びを仲間と実感することができると思う。こうした経験を通して、私の考える「運動の楽しさ」を味わうことができる体育学習をめざしていきたい。

そのためには、仲間の動きに関心を持ち、技能ポイントをもとに中心となる動きを身に付けることが大切であると思う。また、身に付けた動きを、多くの仲間に評価してもらい、成果として動きの高まりを実感できるようにすることも大切であると思う。

以上の考えから、次の2点を重視し、テーマに根ざした実践に取り組むことにした。

- 仲間と動きを高めることができる教材の工夫<手立てⅠ>
- 動きの高まりを実感することができる評価活動の工夫<手立てⅡ>

## 2 授業をどのように計画し、実践しようとしたか。

- (1) 対象学年・領域(教材) 5年生(35人)・短距離走とリレー
- (2) 中心となる動き ①バトンを受ける人の適当な距離で勢いのよい走り出し  
②バトンのスムーズな受け渡し
- (3) 指導計画(8時間完了)

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	
3分 8分	オリエン テーション	基礎感覚を高める運動							
		かけこみゴー!(5秒間走)				かけこみゴー!(7秒間走)			
33分 42分	チーム 練習	走順決め	<u>中心となる動き</u>					タイムレース	
		①を高める場面		②を高める場面					
		A	B	C	D				
		<手立てⅠ>・<手立てⅡ>						チーム練習	
		タイムレース<手立てⅡ>						チーム対抗リレー	
振り返り									

(4) 具体的な手立て

ア 仲間と動きを高めることができる教材の工夫

中心となる動きを2点に絞り、教材の工夫を取り入れた。各チームで技能ポイントに絞った練習に取り組むことによって、仲間と共に動きを高めていくことができる考えた。

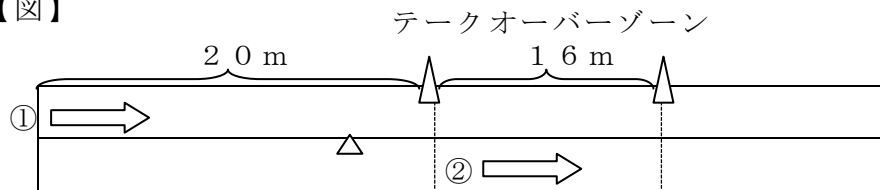
(ア) バトンを受ける人の適当な距離で勢いのよい走り出し

**A** ダッシュマーク鬼ごっこ

**【方法】**

- 各チーム70cm幅の練習コースを2つ使用する。
- バトンを渡す子ども①が左のコース，受ける子ども②が右のコースを使用する。
- ①が全力で走り，ダッシュマークを過ぎた瞬間に，②が走り出す。
- ①が右手で②の左肩にタッチできれば，ダッシュマークの距離を広げ，タッチできなければダッシュマークの距離を狭める。
- ダッシュマークの距離は，自分の足の10足分から始める。

**【図】**

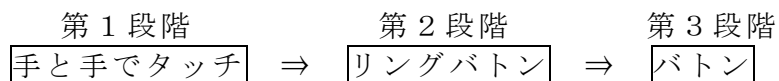


**B** 段階的な指導

**【方法】**

- ダッシュマーク鬼ごっこで適当な距離をつかんだ後，その動きをバトンパスの動きに近づけていくために，以下の順序で段階的に動きを高めていく。
- ダッシュマーク鬼ごっこと同様の練習コースを使用する。

**【順序】**



(イ) バトンのスムーズな受け渡し

**C** フォームチェック

**【ポイント】**

- ① バトンを渡す人に左の手の平全体を見せる。
- ② バトンを受ける左腕を体の真横に，肩の高さに振り上げる。



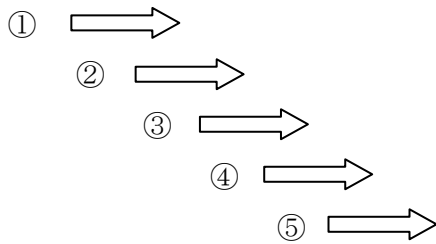
このフォームを身に付けることによって，スピードを落とさずにバトンを受けることができる考えた。

## D かけ声バトンパス

### 【方法】

- 各チーム5人で、斜めに整列して同じスピードで行う。
- ①がバトンを持ち、②に渡す。その後、③→④→⑤の順でつないでいく。
- バトンは右手で渡し、左手で受ける。
- チーム全員で「ハイッ、パッ、グッ」と声をかけ合いながら、リズムよく行う。

### 【図】



以上を **止まって** ⇒ **歩いて** ⇒ **ジョギング** の順で行う。そうすることで、**C** で身に付けたフォームでリズムよくバトンをつなぐことができると考えた。

**C**、**D** のまとめとして、ダッシュマーク鬼ごっこを行った練習コースを使用して、全速力でバトンパス練習を行う。

## イ 動きの高まりを実感することができる評価活動の工夫

毎時間、技能ポイントについて、異なる2つの仲間（同じチームとペアチーム）による相互評価活動を取り入れた。これにより、チーム練習によって身に付けた動きをタイムレースの場で発揮し、動きの高まりを実感できると考えた。

### チームによる教え合い

中心となる動きを身に付けるために、毎時間、全児童に確実に身に付けさせたい動きを1点絞って、学習カード [資料1] に示す。そうすることで、運動者にとっては意識するポイント、観察者にとっては観察するポイントが明確になる。

学習カードを用いた相互評価活動により、5人チームでペア練習を行う際、残りの3人が仲間の動きの高まりを見逃すことなく評価することができる。と考える。

### ペアチームによる教え合い

タイムレースを行う際、ペアチームで同じ走順の人を評価させる。そうすることで、本時の学習で自らの動きが高まったことを実感することができる。

また、他チームとの教え合いも増える。

[資料1 第6時：リズムのよいバトンパス]

### 身に付けさせたい動きを明確にした学習カード

~バトンをスムーズに受けわたせるようにしよう!②~

年組番名前 \_\_\_\_\_

(バトンを受ける人に注目しよう。)

ここが今日のポイント!!

① 「ハイッ」 → 「パッ」 → 「グッ」 のリズムを身に付ける。

### 3 実践をどんな内容で行い、子どもはどう変容したか。

#### (1) 仲間と動きを高めることができる教材の工夫

第3時でダッシュマーク鬼ごっこを行った。子どもたちは初めてのルールで夢中になって取り組んでいた。その中で、ダッシュマークの適当な距離を見つけることができた1組のペアを発表させた。その際、「この動きって何かの動きに似ていないかな。」という教師の発問に対して、A児が「リレーのバトンパスの動きだ。」と閃



【ダッシュマーク鬼ごっこの様子】

いたように発表した。学習活動の意味を理解した子どもたちは、再度ダッシュマーク鬼ごっこに取り組むことで、適当な距離を見つけることができた。

ところが、タイムレースでは、期待したほど記録が伸びなかった。実際にバトンを使うと、バトンをつなぐことに意識が集中してしまい、適当な距離で勢いのよい走り出しをすることができなかったことが原因であった。

第4時の段階的な指導では、前時の反省を踏まえて、実際にバトンを使った時の動きに近づけていけることを目標とした。始めは、手と手でタッチ、続いてリングバトン、最後にバトンを使って練習を行った。



練習を繰り返していくうちに、次第に適当な距離で勢いよく走り出してバトンをつなぐことができるようになり、タイムレースでは記録が大きく伸びた。

【リングバトンを使って練習する様子】

第5時のフォームチェックでは、バトンパスをスムーズに行うことを目標とした。始めは、止まった状態でバトンを渡す人に左の手の平全体を見せることに注意して練習に取り組むことにした。



【身に付けたフォーム】

多くの子どもがすぐにできるようになったため、バトンを受ける左腕を体の真横に、肩の高さに振り上げることに注意して、練習に取り組んだ。フォームを身に付けることでバトンの受け渡しミスが著しく減少した。

第6時のかけ声バトンパスでは、前時で身に付けたフォームで「ハイッ、パッ、グッ」というリズムのよいバトンパスを行うことを目標とした。練習を繰り返すことで、全速力で走りながら、「ハイッ、パッ、グッ」のかけ声をかけて、リズムのよいバトンパスをすることができるようになっていった。



【かけ声バトンパスの様子】



## (2) 動きの高まりを実感することができる評価活動の工夫

### チームによる教え合い

第4時で確実に身に付けさせたい動きは『勢いのよい走り出しをして、バトンを受けよう！』であった。そんな中、後ろの走者を気にして、勢いよく走り出せないB児がいた。その様子を見ていたC児が、「後ろの走者は絶対に追いついてくれるから思い切り走り出してごらん。」と励ます場面が見られた。

B児は後ろの走者を信頼して、次第に勢いのよい走り出しができるようになっていった。タイムレースでは、テークオーバーゾーン内でスムーズなバトンパスをすることができ、授業の振り返りの場面ではチームの仲間から賞賛の声があがった。

第5時で確実に身に付けさせたい動きは『バトンを渡す人に左の手の平全体を見せよう！』であった。そんな中、ポイントに注意して練習に取り組んではいるものの、なかなか思うようにバトンが繋がらないペアがあった。ペアの後ろの走者であるD児が、「手の平は後ろに見えているけど、もっと指の間を開けるとバトンを渡しやすい。」とアドバイスしていた。それを見ていた同じチームのE児が、「人指し指と親指の間を開けるといいよ。」と付け加えていた。そのアドバイスを聞いたF児が実践してみると、きれいにバトンがつながるようになった。



【バトンを受けるF児の様子】

第7, 8時では、タイムレースを前半に行い、その反省点をチーム練習の時間で改善しようとしていた。これまで学習してきたAからDを振り返り、改善点を各チームで話し合った。

各チームで学習カードを見ながら、ダッシュマークの距離やバトンを受けるフォームを再確認する様子が見られた。チーム内でスムーズにバトンパスを行えるペアが見本を見せたり、コツを教えたりするなど、どのチームもチーム対抗リレーに向けて、教え合いは活発になっていった。



【フォームを再確認するグループの様子】

### ペアチームによる教え合い

タイムレースの際にペアチームで評価し合う活動では、「がんばれ！」という励ましの言葉から、「手の平をしっかりと見せてね！」という動きを高める言葉へと次第に変わっていった。さらに、第7, 8時のチーム練習では、バトンパスがスムーズなチームの動きを参考にして、自分たちの動きに生かそうとする場面が見られ、各チームが相乗して動きの高まりを実感することができた。



【ペアチームによる観察の様子】

#### 4 実践の結果、どんなことが明らかになったか、また課題は何か。

##### (1) 仲間と動きを高めることができる教材の工夫

**A**ダッシュマーク鬼ごっこを行うことで、適当な距離をつかむことができるようになった。しかし、バトンパスの要素が入ったことで、バトンをつなぐ意識が強くなり、第3時のタイムレースでは、第2時に比べ記録の向上が見られなかった。〈図1参照〉

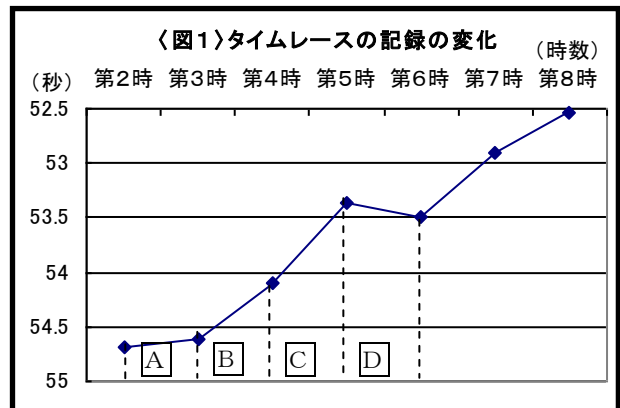
**B**段階的な指導を行うことで、ダッシュマーク鬼ごっこで身に付けた、「適当な距離での勢いのよい走り出し」から、バトンパスを含めた動きにつなげることができるようになった。

その結果、第4時のタイムレースの記録の向上につながった。

**C**フォームチェックを行うことで、走り出しのフォームに近い動きで、スピードを落とさずバトンを受けられることができるようになり、第5時の記録が大きく向上した。また、フォームが安定することで、バトンの受け渡しミスも著しく減少した。

**D**かけ声バトンパスを行うことで、リズムよくバトンをつなぐことができるようになり、スムーズなバトンパスの動きを身に付けることができるようになった。

しかし、第6時のタイムレースでは、かけ声をかけることに意識が強くなり、走り出しのタイミングが遅れてしまい、記録の向上が見られなかった。



##### (2) 動きの高まりを実感することができる評価活動の工夫

**チームによる教え合い**によって、これまで以上に評価しやすくなり、タイムレースの記録向上につながった。これは、運動者の動きを観察者が見逃すことなく、活発なアドバイスや評価活動をすることができたからと考える。

**ペアチームによる教え合い**によって、他のチームの動きに関心をもつようになり、動きを参考にしたり、自らの動きの高まりを実感したりすることで、単元を通してタイムレースの記録が向上していったと考える。

##### (3) 成果と課題

- ダッシュマーク鬼ごっこやかけ声バトンパスなどに取り組むことで、中心となる動きに焦点を絞りながら、仲間と共に動きを高めていくことができた。
- 技能ポイントを絞って評価活動を行うことで、一度に多くのことを考えながら、運動することが苦手な子どもでも、仲間の評価により動きの高まりを実感することができた。
- 第6時に、かけ声バトンパスを行うことで、タイムレースの記録が下降してしまった。単元の始めから、「ハイッ」の声は、定着させておく必要があった。
- 学習カードを参考に教え合いをすることはできるようになった。しかし、自分たちで具体的アドバイスやアイデアを出し合うことができなかつたので、関わり合いの充実を図る必要がある。